
魔法先生ボーボ

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ボーボボ

【Nコード】

N4257Y

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

これは魔法先生ネギまの世界に転生した一人の転生者と仲間たちのハジケ物語

プロローグ（前書き）

初めての小説です。 弟の携帯借りて書いています。 もしかしたら弟も小説書くかもしれません。

プロローグ

「んっ？ここは…？」 「気がついた？」

「おまえ誰？」

「私は女神様…そしてあなたは死んだの。」

「ふーん…それで？」 「えっそれでって、ふつーおどろくの

…まあいいわあなたを転生させてあげる…さあほしい力をいいなさい。」 「ハジケリストにして。」

「えっええええええ！なんでハジケリストふつうもったかっこいい力えらぶよね！」

「ハジケリストにしてくれたらほかいらねーんだよととしろブス。」 「ちよっブスって…もうあんたじゃっかんハジケてない…まあいいわしかしこのハジケという力は神々でも手にあまるわ…でもふつうえらばないけどね転生者…まっいいわ、ほい！」

「んっ何か変わったの？」

「まっきっかけ与えただけだからねあとはあんたしだ…」

「鼻毛真拳奥義マリネージェ！」

「うぎゃあああああ！」

「おっでた。」

「ふつういきなりやる！？」

「うるせー！！」「ええー！！？」

「でっどこ転生すんの？」

「魔法先生ネギまの世界だけど。」

「へえー何ソレ？」

「知んねえのかよ！」

「よし…行くかっとそのまえにブス頼みあんだけど。」

「えっ何？」

「ボーボボたちとクロスできね？」

「まあできないことないと思うけど…。」

「じゃボーボボとヘッポコ丸とビュティとソフトンと首領パッチと破天荒とついでに天の助と田楽とガ王。」

「ついでって…OKわかったよ…じゃ先にあなたをネギまの世界へ…」

「いってきます。」

ピョーンと何か空いてた穴に飛び込む転生者

「えーかってにいっちゃったよもう完全にハジケてるよ!!」

プロローグ（後書き）

小説書くのって疲れますねでも面白いです。
続きががんばって書こうと思います。

俺か…そうだな俺は（前書き）

明かされる転生者の名前！ その名は…

俺か…そうだな俺は

ネギまの世界…

「秘密を知られたからには記憶をけさせていただきます!」

「ええっ」

今魔法先生ネギまの主人公ネギがアスナの記憶を消そうとしていた

「ちょっとパーになるかもですか許してくださいね」

「ギャーちよつと待ってーっパーッて!?!」

「消えろーっっ」

「キヤーー」

パシユウウツ

しかし消えたのは記憶じゃなくて服だった

「あ・・あれ」

「いやーっッ」

「いやーっ露出狂よ!」

急に現れた転生者

「あっあなたは誰ですか!?!」

急に現れた転生者にそう問いかけるネギ…そして転生者は答える

「俺か…そうだな俺は破路毛道タカオだ!?!」

「変わった名前ですね…」

「今考えたしな。」

「今考えたの!?!」

「ねえ見てあの子露出してゐるわよこんな所で。」

「変態じゃない本当いやよねー」

「まったくねよねー」

「あんたらも誰!?!」

急に現れた三人組に対してそう言うアスナ

「俺はボボボーボボーボボだ。」

「俺は首領パッチだ。」

「俺はところ天の助…所で君裸だねこのぬの服をあげよう。」

「裸より恥ずかしいわよ!?!」

「ええ!!」

「確かにー。」

「うんうん。」

「ないよねあれ。」

「ひどい!」

「ここにいたボーボボ。」

「ビュティ。」

「また変なことしてたの。」

「いや今回はこいつがしてる。」

そう言いアスナを指さす

「別にしてないわよ!!」

「えっでもお前裸じゃん。」

「あっ」

「本当だ…」

「こっこれは違うのよ!」

「犯人はみんなそう言うぜ？」

「何の犯人よ！」

「露出狂の。」

「露出狂じゃないわよ!!」

などといいあっている時にタカオはあることに気づいた

「あれ…ボーボボ他の奴らは？」

「他の奴らか実は…」

「実は…？」

「女神の奴がやらかしやがったんだ!!」

「一体何しやがったんだあのブス！」

「それはだな…」

回想…

「えーではみなさんにはネギまの世界にいてもらいます。」

「おっしゃーハジケてやるぜ！」

「その世界の主食をとろてんにするぞ。」

「俺は魔法覚えようナントカパトローナムってやつ。」

「その魔法ネギまの世界ないんですけど…。」

「ハジケ組をその世界にも広めましょうオヤビン！」

「バビロン神の導きのままに…。」

「僕のかawaiiさその世界にも広げるのらー」

「マスコットの座はゆずらん。」

「僕が元祖なのらー。」

「俺の真拳他の世界だとちよつとな…」

「そもそも私たち何するんだろうね。」

「私にもわかりません…えーとりあえずこの装置に乗ってください、みなさん。」

装置に乗るボーボボたち

「えーとスイッチは…あっ！へみゅ。」

転ける女神そしてスイッチやら何やら色々ある装置にぶつかる。

ブーブー

「何これやばいんじゃないの!？」

「落ち着けみんな落ち着けー!!」

「そう言ってるボーボボが一番落ち着いてないよ!!?」

「ボーボボ、パチ美怖い!」

「うるせー!」

グシャ!

「げぶっ!」

「みなさんしゅみましえん。」

「女神次あったら覚えてろテメー!!!」

ブウウン! カッ!

回想終了…

「と言うわけなんだ。」

「あのブスへたこきやがってぶっ殺す!」

「俺も手伝おう。」

「サンキューボーボ。」

「二人とも女神さんだって故意にやったわけじゃないんだから…。」

「故意じゃねーで済んだらポリスはいらねーんだよ！」

「そこは普通に警察っていえばいいでしょ！」

「何かギャーギャー騒いでるわねあいつら…。」

「そうですね。」

「おーいその人達何やってるんだ？」

「あっ高畑先生。」

「アッ、アスナ君。」

「なんで驚いた顔してるんですか高畑先生…あっ。」

アスナはタカオたちが騒いでいるのをみて忘れていた自分が裸でいることをしかし今思いだしたようだ。

「ひっ…いやあ…っ」

「いやあ…見ないでえ…」

首領パッチはアスナの真似をしたそしてこのあと…

「「死ね首領パッチ!!」」

「ぐぎゃあ!!!!」

となるのだった。

「これからどうすかったな。」

一人これからどうハジケけるか考えるタカオだった。

薬 大パニック！（前書き）

タカオ「今日もハジケてハジケまくるぜ！」

薬 大パニック！

チュンチュン チチチ…

「全くもーバイトも遅刻しちゃったしホントあんたなんか泊めんじやなかった。」

「えうつ僕のせいじゃ・・・」

「仲悪いなー二人…んっあれ何や？」

木乃香の見た先にはハジケハウスと書かれた家があった。

「こんなの建ってなかったよね・・・」

「そうやと思うけどな・・・」

二人が会話してしているとハジケハウスから人が出てきた。

「んーいい朝だこんな日は牛乳とジュエルミートに限るな。」

タカオは牛乳とジュエルミートで朝を満喫していた。

「人住んでたよ！？てか昨日の奴！？」

「あのお肉おいしそーやな。」

「気にするところじゃないでしょー！！」

「君たち遅刻するぞー。」

タカオがえらくまともなことをアスナたちに言った。

「あっいけない急がなきゃ。」

アスナはそう言い走りだした。

「急がなきゃ！」

口にパンをくわえて制服を着た首領パッチも走って来た。

「やべっ、遅刻する。」

そこにボーボボも来て首領パッチとぶつかる。

「きゃあ！」

「ごっ、ごめん大丈夫？」

「どこ見て…かっ、かっこいい。」

「どうした？」

「なっ、なんでもないわよ！」

「朝っぱらから何やってんの二人とも！！」

二人の茶番劇を止めにビュティがやって来た。

「よくある学園恋愛ものの出会い。」

「それは分かるよ！ 恥ずかしいからハウスに戻って！！」
「はい。」

などと二人がばかやってる間に原作部分をちよつとはしよる。

「ふう——どーしょ」

カランコロンコロン・・・

「——ん？」

ネギのリュックから何かが転げ落ちそれに気づくネギ。

「こ、これは・・・！？ 昔おじいちゃんがくれた『魔法の素丸薬七色セット（大人用）』・・・！？」

「へえー何ソレ？」

急に現れるタカオ。

「わっ！？」

「驚くなよ。」

「驚きますよ急に現れたら！」

「で・・・それで何すんだそれ食って今の僕は百倍強いとか言うの？」

「それ何の話ですか・・・これそういうのじゃないと思います。」

「じゃ、ちょっと一つくれ。」

そう言って一つ丸薬をとるタカオ。

「あっ！」

「パクっゴクン・・・うおおおおお！！！」

タカオは丸薬を飲んだするとタカオの背中から・・・チャクラでできた蛾の羽が生えてきた。

「ええ！？何か生えてきた！！？」

「今の僕は百一倍強い！！」

「何か中途半端ですね・・・。」

「そういやお前はそれで何しよーとしてたんだっけ？」

「それはこれでホレ薬を作ってアスナさんにあげようと・・・でもタカオさんが一つ使っちゃたからうまくできるかどうか・・・。」

「仕方ないじゃあこれをやろう。」

そう言ってタカオは一つの丸薬っぽいものをネギに渡した。

「これは？」

「たぶん材料の代わりになる丸薬。」

「たぶんって・・・でも仕方ないこれを使おう。」

ホレ薬を作るのに取り掛かるネギ。

「ラス・テル・マ・スキルマギステル、アゲナスカートウルポテイ
オアモーリス！！」

「ナントカカントカパトローナム！！」

ボボンッ。

「で・・・できたみたいだ！！！！」

「おっ、やったじゃん。」

「これを飲めば人間はおろかあらゆる異性におそらくモテモテに・・・
・アスナさんきつと喜ぶぞ！！」

「やべ、丸薬の副作用が・・・。」

チヨウジみたいに木にもたれて倒れるタカオそして…

中等部二年A組・・・

「アスナさん、アスナさん。」

「・・・・たまた来たわねネギ坊主。」

色々あってイライラしてるアスナ。

「何の用よ。」

「実はできたんですよアレが!!」

「アレ？」

「ホレ薬ですホレ薬^{たぶん}。」

薬をもらわずにアスナは歩きさろうした。

「あ待ってください！本当に効くんですよー。」

「いらないって言ったでしょ・・・ったく。」

「本当なんです！ダメされたと思ってちよつとだけでも・・・。」

「あんたが飲みなさいよ」

「はもごっ、ごっくん。」

ネギに無理矢理薬を飲ませるアスナ。

「間違えてパンツ消しちゃうよーな奴の作ったモノ飲むわけないでしょ。」

「ゴポ、ゴポッ。」

「・・・・・・。」

「ゲホ、コホッ、あうえー。」

「ホラなんにも起こんないじゃない。」

「あれ・・・おかしーなー。」

「何のつもりか知らないけどねそんなことじゃキゲン直さないわよ、フンッ。」

「や、やっぱりそうですよねゴメンナサイ・・・。」

「アスナ、うちちょっと百鬼夜行を作ってくるわー。」

「え!?! 何急に变なこと言ってるの木乃香!?!?」

「だってうちぬらりひよんの孫やもん。」

「ぬらりひよん!?! 学園長先生のこと言ってるのあの人それっぽいけどぬらりひよんじゃないわよ!?!」

「さー作るえうちの百鬼夜行。」

「て・・・聞いてないし!?!」

「この世をネギ先生を中心としたシヨタによるシヨタの世界にしますわ!」

「委員長も变なこと言い出したー!?!?」

「ニンジンソード!」

「ならこっちはナスビブレイカー!」

「み、皆さんどうしたんでしょうか。」

「もしかしてあんたの薬の影響じゃ・・・。」

「え、そうなんですか!？」

「それ以外に考えられないでしょうが!!」

「おっ、何かハジケてんな。」

「あなたは、破路毛道さん!」

「あんたなんでここにいのよ!!」

「そりゃハジケを感じたからだ。」

「ハジケ!？」

「そうハジケだ。」

「ハジケって何ですか？」

「まあ簡単に言うなら説明のつかないものだ。」

「結局分からないんじゃない・・・。」

「あのもしかして破路毛道さんからもらったあの丸薬・・・。」

「あーあれかあれ飲んだ本人のまわりをハジケさせたくする鼻くそだったわ。」

「え、鼻くそ!？」

「汚いわね・・・。」

「でもそれなら何でアスナさんはハジケてないんだろう。」

「それはそいつがツッコミリストとして目覚めているからだ。」

「ツッコミリスト!？」

「ボケを成立させるのに必要なツッコミをする奴らのことだ。」

「私、そんなのになってたの・・・。」

「た、確かにアスナさんするどいツッコミしてたかも・・・。」

「してないわよ!」

「パントマイムパントマイム。」

「あんたは急に何やってんのよ!!」

「それだあ! そうそのツッコミ。」

「あ、つい反射的に・・・。」

「あの破路毛道さんどうすればハジケた人たちを戻せますか。」

「簡単だ気絶させればいい。」

「それだけ!？」

「うんそれだけ。」

「じゃあ早く気絶させないと・・・。」

「こうなったのには俺にも原因がある手伝おう。」

「驚いたわ・・・あんたそんな奴に見えなかったのに意外に責任もつタイプなのね。」

「俺式真拳奥義『魔王には効かない役立たずのザラキ』!」

タカオをがその奥義を放った瞬間倒れていく生徒とネギ。

「ちょっと、あんたそれ死の呪文でしょ!！」

「大丈夫だちゃんとみんな生きている・・・たぶん。」

「たぶんて何よお!！」

アスナはすぐにみんなの脈をはかった生きていた・・・ただ一人を除いて。

「ねえ・・・ネギの脈ないんだけど。」

「何!じゃあ早く棺桶に入れないと!」

「あんたふざけてる場合じゃないでしょ!！ネギ、死んじやったのよ!！」

「わかったじゃあドラゴンボール七つ集めてくる。」

「だからふざけんなって言ってんのよ!!!」

「アスナさん怖い！わかりましたよ、俺式真拳奥義『物語上死んだ人には使えないザオリク』！」

光がネギを包む。

「本当に生き返ったの……？」

「あれ？僕は一体？」

「ネギ！」

ネギに抱きつくアスナ。

「ア、アスナさん？」

「よかった……本当によかった。」

「ど、どうしたんですか一体？」

「いやーよかった、よかったこれにて一件落着。」

「じゃ……ないわよ。」

「えっ？」

鬼神のようなオーラを漂わせたアスナがタカオに近づいていく。

「もとはといえばあんたのせいでこんなことに・・・。」

「いやそいつが薬作ろうとしたのも原因だと・・・。」

「ちょっと反省しなさい!!!」

タカオを思いっきりぶつとばすアスナ。

「ぎゃあああああああああああ!!!」

「あ、あのアスナさん機嫌は・・・。」

「あ、それもういいわよ。」

「え、あ・・・ありがとうございます。」

アスナはタカオのせいで機嫌が悪かったことはどうでもよくなったのだった。

薬、大パニック！（後書き）

タカオ「いやーネギ先生、生きててよかったねー。」

アスナ「のんきに言うんじゃないわよ一体誰のせいで危なかったと思うの。」

タカオ「次回もハジケるからよろしくな！」

アスナ「ちょっと無視すんじゃないわよ！」

作者「次回もどうか見てください。」

バラモスって一人で倒すとご褒美がもらえる(前書き)

タカオ「ドラクエ3って名作だよな。」

バラモスって一人で倒すとご褒美がもらえる

「ここまで来れたのはバカレンジャーの皆さんの運動能力のたまものです。」

バカレンジャーと呼ばれる彼女ら（アスナ・まき絵・クーフエイ・長瀬楓・綾瀬夕映）とネギは頭がよくなる魔法の本を探しに来ていた

「おめでとうです。さあこの上に目的の本がありますよ。」

ゴゴ・ゴトンッ

「あ・・へっ!？」

「よく来たな勇者たちよ二度と復活出来ぬようにハラワタを食らいつくしてくれるわ。」

アスナの見た先にはバラモスの格好をしたタカオがいた。

「何やってんのよあんた!」

「バラモスの真似。」

「みりゃわかるわよ!！」

「じゃあ聞くなよ。」

「・・・じゃあ質問を変えるわ、何であんたがここにいるの。」

「ボスがいそうな場所さがしてたらここにたどり着いた。」

「そんな理由!？」

「そう、そんな理由。」

「魔王バラモス覚悟!」

ボーボボが現れた当然格好はドラクエ3の勇者の格好だ。

「来たな勇者ボーボボよ、たった一人で向かってくるとはいい度胸だ。」

「一人じゃない!仲間ならいるぜ!棺桶の中にな!」

「勇者なのに仲間を守れてないの!?!？」

「ここにくるまでの敵が強くてな……。」

回想……

「ボーボボもうHPがヤバい回復魔法を……」

「うるせー!MPがもったいねーだろ!」

「ボーボボ、毒解除してくれー。」

「断る!」

回想終了

「て、わけだ。」

「それあんたの責任でしようが!!」

「おいしいツツコミだ今日はビューティがストレスからきた風で休みだから頑張ってくれ。」

「なんでよ!!」というかその風あんたらが原因じゃない!!」

「え?なんで?」

「自覚なしかよー!!!!」

「あのーアスナさん。」

「何よネギ。」

「僕ら魔法の本を探しにきたんじゃないんですか?」

「そうだった・・・こんなバカ達に構ってる場合じゃないんだった。」

「魔法の本?それっぽいのならあそこにあるぜ。」

「あっ・・・あれは!?!」

「ど、どうしたのネギ!?!」

「あれは伝説の・・・」

「さとの書の書だ！」

「えっ、まじでじゃあ、あれで賢者なれんの。」

ネギの言葉を遮りドラクエ3のさとの書とポーボボが言いタカオはそれに反応した。

「いや・あれメルキセデクの書なんですけど・・・・。」

「いやメルクの星屑は本じゃねーだろ。」

「メルキセデクの書よ！あんたちゃんと聞いてた！？」

「えっ、何？」

「ねえ思いつきり殴っていい？」

「あれなら確かにちよつと頭を良くするくらいカンタンかも・・・。」

「本当！ネギ！」

「あのアスナさんこの人達は・・・。」

「ああこいつらただのバカだから気にしないでいいわよ。」

「そうですか・・・。」

「それよりもあの本で最下位脱出よ！」

「やったー！！」

「一番ノリア

ルー。」

「あーあたしもー。」

「あ、みんな待って!!」
バカレンジャーに呼びかけるネギ。

「あんな貴重な魔法書絶対ワナがあるに決まっています氣をつけて!!」

ガコン!

「えっ。」

「キヤー。」

「いたー。」

「わあ。」

「いたた・・・え・・・な、何コレ・・・。」

ワナにかかったバカレンジャーとネギと木乃香。

「コレって・・・?」

「ツ・・・ツイスターゲーム・・・?」

ブウ・・・ンゴゴゴ・・・

「フオフオフオ・・・」

ズズウ・・・ン

「この本が欲しくば・・・わしの質問に答えるのじゃーフオフオ
フオ」

「あいつフオフオフオてバルタンかよ。」

「いやあれゴーレムです。」

「バルタンみたいな言葉使いつて意味でバルタンかよって言ったんだよ！人の揚げ足とるみたいに言つてんじゃねー！！」

「えええ！」

「ーでは第一問『デイファイカルトDIFFICULT』日本語訳は？」

「ええー！？」

「何ソレー！？」

「み、みんな落ち着いて！！大丈夫！ちゃんと問題に答えればワナは解けるハズ！」

みんなを落ち着つかせるために言葉を発するネギ。

「落ち着いて『DIFFICULT』の訳をツイスターゲームの要領で踏むんです。」

「ええーそんなコト言っても。」

「『デイ、デイフィコロト』って何だっけ先生ーッ。」

「教えたら失格じゃぞ。」

「いっ・・EASYイージーの反対ですよっ！えと『簡単じゃない』！！」

「『む』」

「そうそう！！」

「『ず』」

「『い』ね。」

「『難い』正解じゃ。」

「や・・やった。」

「キヤーこれで本GETだねー。」

・
しかし問題は一問で終わらずこのあとも続いていった。そして・・・

「最後の問題じゃ。」

「やった最後だって」

「『ディッシュDISH』の日本語は？」

「えっ……ディッシュ……。」

「ホラ食べるやつ！食器の……。」

「メインディッシュとかゆーやろー。」

「そうかわかったぜ！」

なぜかここでタカオが反応した。

「『ト』」

「『リ』」

「『コ』」

「『ぬ』！」

タカオ達はトリコとやりたかったようだが天の助がよいな『ぬ』を入れた。

「バッキヤロー天の助でめーのせいで間違えたじゃねえか！！」

「何やってんだこのバカ！！」

「ぶっ殺すぞ！！」

「だって『ぬ』を入れたかったんだもん。」

「このバカー！」

バキィ！

「げふう！」

「て、バカはてめーら全員じゃあ！！！」

キレルアスナ・・・まあ確かにその通りである。

「ハズレじゃなフオフオフオ。」

「こんのバカどものせいでー！！！」

バカアツ　ゴオオオオオ

落ちていく全員。

「いざ行かんアレフガルド！！！」

「打倒ゾーマ！」

「俺のハジケでやってやるぜ！」

「この秘剣ぬの剣でぶったぎってやるぜ！」

「こんな時までふざけんなー！！！」

その頃ビュティは・・・

「くしゅん！うう寒いみんなあんまりにおかしいことやってないといいけど・・・。」

しかし当然それは無理でした。

バラモスって一人で倒すと褒美がもらえる(後書き)

タカオ「いよいよゾーマと激闘か！」

アスナ「ふざたこと言ってる場合!!」

ボーボボ「装備は万端だぜ！」

首領パッチ「俺のハジケで圧倒してやるぜ！」

天の助「ぬの剣の切れ味見せてやる！」

アスナ「お前らしい加減にしろー!!!!」

ゾーマってめっちゃくちゃ威厳のある大魔王だよね（前書き）

タカオ「ゾーマって威厳半端ねーよな。」

ゾーマってめちゃくちゃ威厳のある大魔王だよね

図書館島最深部

「うーん・・・」

「う・・・」

「あれ・・・？ここ・・・どこ？」

「・・・そ、そうだ僕たち、英単語のトラップを間違えてゴーレムに落とされちゃったんだ・・・。」

「てかあのバカどものせいだけだね。」

そう言いアスナはタカオ達をにらめつける。

「チートスうめー。」

「・・・本当におもいきりアイツ殴りたいわ。」

「それよりアスナさんここはどこでしょうか？」

「アレフガルド大陸だろ。」

「ちょっとあんた黙ってくれる！」

「まてタカオ。」

「なんだボーボボ。」

「アレフガルド大陸にしては明るいぞ。」

「まさかもうゾーマは倒されたのか!?!?」

「そもそもゾーマなんていないわよ!!!」

「……ここは『幻の地底図書室』!?!?」

「何! 幻の大地だと!?!?」

「ねえ本当、黙ってくんない。」

「地底図書室って何や夕映?」

「地底なのにあたかい光に満ちて数々の貴重品にあふれた、本好きにとってはまさに楽園という幻の図書館……。」

「へー図書館にしては広いけど。」

「ただしこの図書室を見て生きて帰った者はいないとか。」

「そりゃゾーマ倒したらギアガの大穴閉じるもんな。」

「黙っててって言ったわよね?」

「アスナさん怖い!」

「・・・とにかく脱出困難であることは確かです。」

「ど、どうするアルか？それでは明後日の期末テストまでに帰れないアルよ。」

「それどころか私たちがこのままおうち帰れないんじゃ・・・？あの石像みたいなのもまた出るかもだし。」

「み、皆さん落ち着いてー（で、でもこの場所は・・・？）」

「痛ッ・・・。」

「アスナさん！？」

「いや、大丈夫何でもないよ。」

「か、肩をケガしたんですか！？さっき落ちた時に・・・！？」

「大丈夫かアスナほれ回復薬だ。」

そう言いタカオはアスナにワサビを渡した。

「こんなので治るわけないでしょ！！」

「ええー！！」

なぜかすごく驚くタカオ

「（よ、よーしあまり得意じゃないけど治癒魔法で・・・。）ラス・テルマ・スキル・・・（ハッ・・・しまった・・・僕、三日間魔法を封印

して今はただの人なんだっけ・・・」。

「いいから試してみろよー効くってコレ。」

「ワサビなんか効くわけないでしょ!!」

「ちえっ!」

「だ、だめですねやはりどこからも登れないようです。」

「ルーラでとべば?」

「本当にアンタは・・・まてよアンタへんな技使えたわよねそれで・・・」。

「残念ながらルーラは薬もらってないからムリ。」

「ドラクエ5かよ!?!? てかこのやくたたず!!」

「み、皆さん元気を出してくださいっ根拠はないけどきつとすぐに帰れますよっ、あきらめないで期末に向けて勉強しましょう。」

「えゝ勉強ヤダー。」

「俺もゝ。」

「私ヤツ君とデートだし・・・。」

「俺はところてんの勉強ならいい。」

「アンタらは関係ないでしょ！」

「と、とにかくがんばりましょう。」

「そうだね・・ネギ君。」

「幸いなことに教科書には困らないようですし・・・。」

「よしじゃあ早速授業を・・・。」

ぐぎゅるゝっ

「・・・と、その前に、食料探しだーっ。」

「俺、ガララワニ捕獲してくる！」

「じゃあ俺、リーガルマンモス！」

タカオとボーボボもないと思われる食料を探しにいった。

「あー待ってください僕もーん・・・あつ、」

パシュウッ

「一つ目の封印が解けた・・・朝日とともに解けるから・・・
今は土曜の朝か、ここに来てから一日経ったんだ・・あと二日・・。」

「千年は生きてそうなガララワニ捕まえたぜー！」

「うわっ!？何、あのワニ!?!?デカツ!！」

「俺は、お恥ずかしい事にリーガルマンモスの子どももしか捕まえられなかった。」

「そのサイズで子どもなの!?!?」

「というか、この地底図書館あんな生物いたんですか・・・。」

翌日・・・(テストまであと一日。)

「では、これわかる人!。」

「ハイ!ハイ!ハイ!」

「えっと確か・・・首領パッチさんでしたよね。」

「答はコカ・コーラゼロです!」

「ええ!？」

「バッキヤローここはペプシコーラだろ!」

「このバカ首領パッチが!！」

「お前ら三人ともバカじゃ!！」

「まったく・・・この劣等生どもが・・・こんな答もわからないのか？ 答は『ぬ』だよ。」

それを聞いたタカオは天の助の腹を拳でぶち抜いた。

「んなわけねーだろ・・・この劣等生が。」

「が、がふっ。」

「言っとくけどアンタも十分劣等生よ。」

「皆さんちよつと休憩にしましょう。」

ネギはみんなに休憩の指示を出した。

「（ふーむ・・・ずっと水に浸ってたハズの本がまったく痛んでないし・・・この無秩序な本棚の並び・・・誰がこんなモノ作ったんだろ？）」

ネギはなんかしらべてた。

「お・・・腕の封印の二本目が消えてる・・・あと一本か・・・明日の朝になれば魔法で外に帰れるぞ・・・ん・・・。」

キャツキャツウフフ

「えっ。」

「キヤー！！ネギ先生のエッチ！！」

ネギが見たさきには水浴びをしている首領パッチがいた。

「もうやだんゝネギ先生。」

「首領パッチゝ。」

ボーボボが走ってきた、そして・・・

「死ね！首領パッチ！！」

ドガァ！！

「げぶう！」

当然こうなるさらに・・・

「追加でふつとべ首領パッチ！！」

バゴォ！！

「うぎゃあああああ！！！！」

タカオが首領パッチに追撃を加えた。

「「イエーイ！！」」

互いにハイタッチするタカオとボーボボ。

「相変わらずだこの人達・・・。」

「あつ、ネギ。」

「あ、アスナさん。」

「このバカどもに変なことされてない？大丈夫？」

「だ、大丈夫です。」

「聞き捨てならねーなアスナ、俺がいつネギに変なことした。」

「一回殺したわよね……。」

「あつ、ボーボボあつちにロトの剣があつたぞ！」

「まじで！！いいこ！！！」

「話そらして逃げたわね……。」

「あの……アスナさん……。」

「あのさネギ……ーこんな所に連れて来ちゃってゴメン……
実は期末で最下位だったらクラス解散の上私たち小学生からやり直
しだっていうから……関係ないアンタを巻き込んだね。」

「……ーは？」

「いや、だから私たちが留年って……。」

「いや、僕がクビになるってことしか聞いてないですけど……。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「え、えゝ何よ、それえ！・・・・てことは留年とか小学生ってのは・・・・・・・・デマ!?」

「た、たぶん・・。」

「あーもうっそんなだったらこんな謎の図書館なんか来なかったわよ。」

「ええっ!? そんなあー。」

「ったくもゝゝやっぱりあんたが来てからふんどりけったりよ。」

「ぼ、僕だってそうですよう。」

キャーッ!

「ん。」

「何ですか!?!」

「とにかく行くわよ、ネギ!」

「わ、分かりました!」

「あつ。」

「誰か助けてーッ、ネギ君、アスナ〜。」

「ま、またあのでかいの!?!」

「動く石像ゴーレムですよっアスナさん!一緒に落ちてたんだ!」

「フオフオフオ・・・フオツ?」

ドゴン!

「フオーー!!!」

「ゴーレムに何かぶつかった!?!」

「あれ、タカオじゃない!?!あ・・・でもアイツぶつかったおかげでまきちゃんが助かったわ。」

「ぐっ、やっぱし強いぜ。」

「フオ・・・。」

「みんな、あの石像の首の所を見るで・・・。」

ゴオオオオオ!!

「へっ?」

「フォ!?!・・・・フォーー!?!」

突如巨大な火の玉が石像にぶつかった。

「あっ!本が燃えた!」

「てか何!?!あの火の玉!?!」

「ありゃゾーマのメラゾーマだ。」

「ゾーマなんているわけ・・・」

「闇の世界で眠るがよい。」

「・・・・・・いたああああああ!?!」

「どりゃー!ぬの剣!」
プルン。

「・・・・メラゾーマ。」

「ぐおー!?!焼き焦げるううううう!?!」

「くらえ!?!首領パッチソード!」

「ふん。」

ゾーマは軽く腕を振るった。

「ぎゃあ!」

「くられえ！ロトの剣！！」

スパン！

「ぐっ。」

ゾーマにかなり効いたようだ！！

「いくぜ俺式真拳奥義！『破壊の風を二度巻き起こすHBエンピツ』
！！」

「そこは普通はやぶさの剣でしょ！！？」

「ぐおおー！！！」

しかしめっちゃくちゃ効いた。

「うそー！！？」

「続けて俺式真拳奥義『タンスの角に小指ぶつけろ』！！」

「いやそれぜったい効かないよ！！」

しかし・・・

「ウグアアアアア！！」

今までの攻撃のなかで一番効いた。

「何か変なのばかり効いてない！？」

「やってくれたな・・・ジゴスパーク。」

「これはヤバイ!!」

「タカオ!友情の力で防ぐぞ!!」

「わかった!!」

「「友情ガード!!!!」」

二人はそう言って首領パッチと天の助を盾にした。

「「アババババッ!!!!」」

「友情ひとかけらもねー!!!!」

「ゾーマァ!!よくも俺たちの仲間を!!」

「許さねえ!!」

「確かに攻撃してきたのゾーマだけど盾にしたアンタらのがどう考えても悪いわ!!!!」

「憎むがいいそれが我が糧となる・・・。」

「あれ・・・何か、ゾーマ全部自分のせいみたいにしてない・・・器デカッ!!」

「ボーボボ!こうなったら合体技だ!!」

「わかった!!」

「マヒャド!」

「メラゾーマ!」

「まさか・・・。」

「『合体奥義『メドローア』!!!!』」

「やっぱりい!!」

「グアアアアアア!!」

ズーーン・・・

「やった倒しぞー!」

「これでアレフガルドは救われる!」

「でも何であのゾーマ、闇の衣纏ってなかったんだ?」

「そう言えば・・・。」

「そういやバトルロードビクトリーってゲームじゃゾーマ倒したあとに闇の衣纏った真ゾーマってのが現れるんだよな。」

「そう言えばそうだったけ。」

「」「あっ!!!!」

ゴゴゴゴゴゴ!!

「第二ラウンドといこうか。」

「復活したー!! しかも闇の衣纏ってるー!!」

「首領パッチ! 光の玉だ!!」

「分かってるぜ! ボーボボ・・・えーと・・・コレだ! あっ。」

ツルツガシャン!!

「よくも光の玉わったなー!! 天の助ー!!」

「えっ!? 俺ですか!!?」

バゴォ!

「ひどい!!」

「クソ・・・どうすれば・・・」

「しかたないSPカード光の玉を使うか。」

「その手があったか!!」

「そんなんでいけるの!!?」

「くらえ! ゾーマ!」

ゾーマの闇の衣がはがれていく。

「行けたァアああああ!!」

「そして俺の切り札で終わらせる!! 俺式真拳奥義『ドラクエ5のバグ技ででる妙に強いボロンゴ召喚』!!」

バグ技ボロンゴがでてきたそしてゾーマに攻撃をくわえる。

「ウッグアアアアアアアアアア!!!!」

「よっしゃあ!!」

「一撃!!!!」

「やったなタカオ!!」

「おまえスゲーじゃねーか。」

「ぬのハンカチあげる。」

「いるかそんなん。」

「ええ!!」

「と、とりあえずゾーマは倒しされたのね。」

「よし帰るか。」

「へっ・・・アンタ・・・ルーラ使えねーとか言ってたわよねどう帰るのよ。」

「リレミトあんじゃん。」

「・・・そう言えばそうね・・・てか使えるならさっさと言えー！
！」

「うぎゃああああああ！！！」

このあと地底図書室から無事脱出したアスナたちだった。

ゾーマってめちゃくちゃ威厳のある大魔王だよね（後書き）

タカオ「うおー！！次回もハジケるぜ！！」

ボーボボ「俺もだー！！」

首領パッチ「俺だって負けねー！！」

天の助「この世界の主食をとろてんにする！！」

タカオ「んなの無理にきまってんだろーが！！」

バキィ！！

天の助「おぶう！」

アスナ「こんな小説だけど次回も見えてね。」

荒らしはやめよう！

「今日もちうは綺麗だぴょーん♪」

この自分を自分で綺麗とか言っている痛いやつは長谷川千雨である。

「あれなんか今むかつく声が聞こえたような・・まつ、気のせいかな。」

気のせいじゃないけどな。

「おハロー（・▽・） qみんな元気ー！？ ー！今日はとーっても嫌なことがあったよん（＞＜） i」

ちなみにこれは一人ごとじゃなくてチャットに声をだしながら入力しています。

「うちのクラスの担任が変態でー!! ちうに色目を使ってくるんだ
よう」

女神転生ハジケ>おいしいもの食べたいなー。

鼻毛祭り>トリコのフルコースぐらいおいしそーなのかな？

パッチキング>いいねえソレ。

女神転生ハジケ>フグ鯨なんてどうだ？

ぬの人>ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ。

鼻毛祭りでも調理が大変だな。

パッチキング>もつと簡単なのにしたら？

ぬの人>ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ。

「なんだこいつら荒らしか!？」

ちうファンHIRO>おいてめえらちうタンのチャット荒らしてん
じゃねえ!!

女神転生ハジケ＞簡単なのか・・・じゃあ金色イクラは？

鼻毛祭り＞それなら調理しなくてもいいな。

パツチキング>いいチヨイスじゃねーか。

[illegible]

ちうファンHIRO>おい無視すんな!!

女神転生ハジケ>うるせーなぶつとばすぞ！！

ちうファンHIRO>やれるもんならやってみやがれ!

女神転生ハジケ>わかった。

ちうファンHIROがログアウトしました。

「って……本当にやったー!!!?なんだこの荒らしども!」

女神転生ハジケ>そういや今のドラゴンボールヒーローズってスペシャルミッション、ブロリーを倒す奴だっけ？

鼻毛祭り＞確かそう立ったな。

女神転生ハジケ>ブロリーって見た感じからして強そうだよな勝てる気しねーわ。

鼻毛祭り＞そうだなー。

パッチキング>今、スーパーサイヤ人3までなれるしなブロリー。

[illegible]

鼻毛祭り>てめーはさっきからうざいんだよ！ぬの人、正直正体わかってるしぶっ殺す！！

ぬの人がログアウトしました。

「こいつらさつきからやりたい放題だな・・・こうなったら管理者権限で・・・あれ・・・強制退去できねー!？」

女神転生ハジケケンシロウってさあ、善人と悪人見る時の目つきちがいますね？

鼻毛祭り＞確かにそうだな。

パッチキング＞てことは北斗の拳での悪人の見極めかたはケンシロウの目つきだな。

女神転生ハジケ＞確かにそうだ！

「くそっ、なんなんだこの荒らしどもは。」

女神転生ハジケ＞ドラクエ4ってさ、ピサロチートだよな。

鼻毛祭り＞確かにアイツいたらクリフトいらねーもんな。

パッチキング＞もともとクリフトいらねーんじゃないの？

女神転生ハジケ＞確かにそうだ（笑）

鼻毛祭り＞役たたずザラキマンだしな。

「なんだこいつら、そんなにクリフトのことが嫌いなのか！？」

女神転生ハジケ＞っーか実際ブライとトルネコもいらねー。

鼻毛祭り＞トルネコは不思議のダンジョンシリーズじゃ勇者の剣と盾装備できて強いのかな。

パッチキング＞商売ごと以外じゃ本気だしたくねーんじゃないの？

女神転生ハジケ＞世界を救う旅じゃ本気ださずか・・・サイテーだ

な。

「最低なのはお前ら荒らしじゃ!!」

女神転生ハジケ>それにしても今度の遊戯王の主人公はさん付けにあたいしねーな。

鼻毛祭り>そうだな前作の主人公たちにくらべると全く威厳がない。

パッチキング>俺、アイツのサインは欲しくねーな。

「遊馬はあとで本人自体もチートっぽくなるわ!!」

女神転生ハジケ>最近ヴァンガードってカードゲームがはやってるよな。

鼻毛祭り>確かにアレ伸びてきてるな。

パッチキング>アニメの主人公は權って奴だっけ?

女神転生ハジケ>そうそう。

「ちっげーよ! 先導アイチだよ! ・ ・ 確かにあいつ主人公っぽくないけど・ ・ 。」

女神転生ハジケ>そういや、めだかボックスでさ安心院の奴が言った、そのようになりたいと思われる主人公の中にボーボボいなかったぜ。

鼻毛祭り>なにー!? なぜだ・ ・ ボーボボがないんだ!!

パッチキング＞外道だからだろ。

鼻毛祭り＞ぶっ殺すぞ！！

「なんかわけわかんねーこといいはじめたなこいつら……。」

鼻毛祭り＞ちよっと、安心院殺してくる！！

女神転生ハジケ＞まで！殺すのは人吉が成長しきってからしてくれ！安心院も一応、関わってるから……人吉の成長楽しみなんだ！！

鼻毛祭り＞それもそうだな……よし殺すのは人吉成長しきってからだ。

「とりあえず殺すのは確定なのか！？」

女神転生ハジケ＞それにしても荒らしもあきてきたなー。

鼻毛祭り＞そうだなー。

パッチキング＞そろそろヤッ君とデートしなきゃ。

女神転生ハジケ＞じゃ、そろそろログアウトするか。

鼻毛祭り＞そうしよう。

パッチキング＞ヤッ君まってね。

荒らし撃退ポリス＞キミたち荒らしダメ連行。

女神転生ハジケ＞なんだ捕まえる気か？やれるもんならやってみやがれー！！

鼻毛祭り＞そうだそうだ！

パッチキング＞ヤッ君とのデートがあるから捕まるわけにわいかないわー！！

女神転生ハジケ

鼻毛祭り

パッチキング

ログアウトしました。

「連行されたあああああああ！！てか荒らし撃退ポリスさっさと来いやーー！！！！」

その後・・・女神転生ハジケたちの行方を知るものは誰もいなかった・・・。

荒らしはやめよう！（後書き）

女神転生ハジケ↓破路毛道タカオ

鼻毛祭り↓ボボボーボ・ボーボボ

パッチキング↓首領パッチ

ぬの人↓ところ天の助

荒らし撃退ポリス↓???

不思議のダンジョンは理不尽だらけ（前書き）

作者「オリジナル話です！」

不思議のダンジョンは理不尽だらけ

コンコン。

「ん？誰かしら？」

ガチャ。

「おいアスナ、春休みだな遊ぼうぜ。」

アスナが玄関を開けた先にいたのはタカオだった。

ガチャン。

「おい、急に閉めんな。」

「春休みになってまで、アンタなんかと関わりたくないのよ！」

「なんでだよー遊ぼうぜー。」

「嫌よ！」

「鍵、開けろよー。」

「はいはい今、開けまーす。」

ボーボボが鍵を開けた。

「て・・・いつからアンタいたの！？てか・・・アンタ、不法侵入

者!!!」

「えっ、不法侵入者だって!?どこにいるんだ!?」

「アンタよ!!!」

「俺は不法侵入者じゃない!窓からどうどうと入ってきた!!!」

「なるほど窓からどうどうとね……それってやっぱ不法侵入者じゃない!!!」

「えー。」

「えー、じゃないわよ!!!」

「まあまあ、そう怒らないで……とりあえず遊びに行こうじゃないか。」

「そうだな、タカオ。」

「だからアンタらと遊ばないって言ってるでしょ!!!それに遊ぶならアンタらの仲間のプルンプルンした奴とオレンジ色のトゲトゲした奴と遊べばいいじゃない!!!」

「あいつらは事情があって遊べねーよ。」

「事情?」

「それはだな……。」

回想・・・

「シューティングスタードラゴンでダイレクトアタック！シューティングミラージュ！」

「うわぁ！負けた・・・やるじゃねーかタカオ、楽しいデュエルだったぜ。」

「さて首領パッチ、罰ゲームをうけてもらおうか。」

「ええ！？そんなの聞いてねーぞ！！？」

「いや、あっちでもやってるし。」

「天の助！死の体感だ！！」

「うぎゃああああああ！！」

「んじゃ、こっちもやるか。」

「お、おい待てタカオ！？」

「マインドクラッシュ！」

「ぎゃー！！！！」

回想終了・・・

「て・・・わけだ。」

「たかがカードゲームで恐ろしい罰ゲームをすんな!! てか、アンタらのせいじゃない!!」

「まあ、それはともかく遊ぼうぜ、ネギも呼んでこいよ。」

「嫌よ! どうせまたアンタネギをやばい目にあわせるんだから!」

「おいタカオ、ネギ捕まえたぜこうなったらネギだけ連れてこうぜ。」

「そうだな。」

「アスナさーん!」

「わかった私も行くわよ!」

「よし、じゃあ行くぜ! 不思議のダンジョンにな!」

「え・・・不思議のダンジョン?」

不思議のダンジョン入り口。

「マジであったの・・・!?!」

「さあ入ろう。」

「どんな宝があっかな。」

「まっ、待ちなさいよ！」

不思議のダンジョン一階

「まずは装備探しだな。」

「どうせ一階だから、ろくなのないわよ」

「おーい秘剣カブラステギ手に入れた！」

「何で一階からそんなのあんのよ!!！」

「あのモンスターが落とした。」

「あのモンスターって・・・あれ・・・？あれって・・・。」

風来のシレンの主人公のシレンが倒れていた。

「モンスターじゃないじゃないー!!!？」

「えー、違うの？」

「あれ風来のシレンの主人公のシレンじゃないのよー!!！」

「まあでもカブラステギ手に入ったし別にいいや。」

「アンタ・・・最低ね。」

「にしてもこのモンスター消えねーな。」

「だからモンスターじゃないって・・・。」

「これ投げてみっか。」

タカオはシレンに向かってジェノサイドの巻物を投げたシレンの存在がダンジョンから消えた。

「アンタあああああ！！何やってんのおおおおお！！シレン存在消えちゃったじゃない！！！！」

「さて、次の階目指そうぜ。」

「シレンの消滅はスルーなの！！？」

「むみゅう！」

「わっ、何ですかこれ！？」

「こいつは、あなぐらマムルだな。」

「むみゅう！」

バシッバシッ

「何か攻撃してきたんですけど！？」

「そりゃモンスターだもん・・・あと、あんま攻撃をくらってっとならなげ。」

「えっ!？」

ネギHP5

「うわっ、本当だ!？」

「むみゅう!」

バシッ

「うわっ、助けてくださいタカオさん!」

「・・・。」

「何ボーっと見てんのよ! 助けなさいよ!」

「いや、ネギ倒してレベルアップしたあなぐらマムルの進化系どうくつマムル倒して一気にレベルアップしようと思って。」

「何、考えてんのかなンタ!！」

「だって弱い仲間ってそのためにいるんじゃない?」

「その弱い仲間ってリクのことか・・・リクのことか!」

「助けてー!」

「ハッ!? ネギ! 今、助けるわ!」

バシッ!

「むみゅ！」

あなぐらマムルを倒した。

「助かりましたアスナさん。」

「礼を言われるほどのことはしてないわよ。」

「あと少しでどうくつマムルになったのに……。」

「黙れ！腐れ外道！」

「おーい階段見つけたぞ。」

「何本当かボーボボ！さっそく次の階だ！」

「さっさとダンジョンから出たい……。」

不思議のダンジョン二階

「何よ……これ。」

ドラゴンハウスだ！

「絶望的じゃなあああああい！！！！」

「大丈夫だ俺はドラゴンを倒す術をもっている！」

「それ本当!?!」

「本当だ・・・いくぜ! 火竜の鉄拳!」

ゴォ! ドカン!

「ギャオオォ!」

「それフェアリーテイルのナツの滅竜魔法じゃなああああ!?!」

「やるなタカオならこっちは鉄竜剣!」

ザンツ!

「グギャアアア!」

「それがジルのおおおおお!?!」

「タカオさんとボーボボさんって魔法使えたの!?!」

「ネギ、気にするところじゃないわ!」

このあとタカオとボーボボは滅竜魔法でドラゴンたちを全滅させた。

「んじゃ、次いこーぜ。」

そう言いタカオは歩きだしたが・・・

カチッ!

「へ?」

ドガン!!

「地雷のワナ!？」

爆発で起きたケムリがはれるとタカオはヤムチャが栽培マンにやられた時のポーズになっていた。

「爆発だからってヤムチャの格好になってるんじゃないわよ!!」

「何を言う!爆発といえばヤムチャのポーズだ!!」

「あのー皆さん階段見つけました。」

「何っ?ネギ少しは役にたつじゃねーか。」

「さっさと進んでこんなダンジョンおさらばしたいわ!」

不思議のダンジョン三階

「ここ初期ダンジョンだからそろそろ終わりかな。」

「二階でドラゴンハウスで初期ダンジョンなの!？」

「ボーボボ・・・締めであれいこうぜ。」

「ああ・・・泥棒だな!」

「やる気まんまんで何、言つての!?!」

「さあ店探すぞ!」

「ちょっ、待ちなさい!」

ダンジョン内、店

「いらっしゃ・・・」

ガン!

店主は倒れた。

「さあ品物かつさらってくぜ!!!」

「いきなり何、店主殺ってんのおおおお!!?!」

「いい品ばっかだな。」

「よし全部拾ったし、店内に作った落とし穴のワナで脱出だ!」

「キミたち泥棒ダメ!」

「おっ、お前は・・・荒らし撃退ポリス!?!」

「今ハ泥棒撃退ポリスだよ。」

「さっさと落とし穴で逃げるぞタカオ!」

「ソウハ、サセナイ界王拳百倍!!」

ギャン! ドカツバキツ!

「うぎゃああああ!!」

「ぐああああああ!!」

「界王拳使ったー!!? あのポリス何者!?!」

「キミたちハ泥棒シテナイミタイダカラコノ持ち帰りノ巻物デカエリナサイ。」

「あつ、ありがとうございます。」

「サテ、コイツラ連行シナイト・・・。」

「ネギ・・・帰ろう。」

「はい・・・。」

今回の冒険の記録

タカオとボーボボ、不思議のダンジョン三階にて泥棒撃退ポリスに連行される。

不思議のダンジョンは理不尽だらけ（後書き）

アスナ「あのポリス何者なのかしら・・・」

作者「今後もちょうくちよくでるかも！」

首領パッチ「んなことより作者！俺の出番増やせ！」

天の助「俺のもだ！」

作者「考えておきますから落ち着いて。」

タカオ「次回もハジケっから見てくださいな！」

アスナ「こんな小説だけどよろしくお願いします！」

食べるラー油絶滅計画（前書き）

サイヤ人絶滅計画のハツチハックってめちゃくちゃ強いよね。

食べるラー油絶滅計画

「最近、食べるラー油ってのが流行ってるらしいのよね。」

「へー、そうなんですか。」

「私も買ってみようかしら。」

アスナがそうつぶやくと突如ニュースが流れた。

「緊急ニュースです、突如数々のスーパーから食べるラー油が消えました。」

「へっ!？」

「不思議な事もあるんですね。」

「そして、食べるラー油のかわりに食べるところでんと言う物が置かれてました。」

「……ちょっと、ハジケハウスまで行ってくる。」

「えっ、アスナさん!？」

アスナはハジケハウスに向かったのだった……だって犯人予想つくしね。

ハジケハウス・・・

「ちょっと！出てきなさい！」

シーン・・・

「出てこいって言ってんでしょうが！！」

ガチャン！

突然、扉が開いて怒った顔のタカオが出てきた。

「あとちょっとでスーパーマリオのクッパ倒せたのにお前がでけー
声出すから負けたじゃねーか！！」

「んなのでもいいわよ！それよりもあの食べるラー油なくなっ
てんのアンタんとこの奴の仕業でしょ！！」

「うん、天の助の仕業。」

「天の助って・・・あのプルプルした奴ね！」

「そうそう。」

「何でそいつ止めないの！仲間でしょ！」

「あいつ仲間だったけ？」

「仲間じゃなかったの!?!」

「いや、仲間だな（捨て駒と言う名の）。」

「アンタ・・・今、捨て駒と言う名のと思ったでしょ・・・。」

「なぜバレた!?!?」

「て・・・本当に思ってたんかい!」

「しかし・・・天の助の事なら大丈夫だ。」

「えっ!?!?」

「ビュティが止めにいったからな。」

「ビュティってあのマジメな人・・・で、なんでその人が止めに行つたの? どう考えてもあの人アンタと違って真拳とか使えないわよね?」

「それはだな・・・」

回想・・・

「ボーボボにタカオ! 今、天の助くんが食べるラー油絶滅させに行くて外に出て行ったんだけど!?!」

「ふーんそれで?」

「それでって・・・仲間が食卓に影響を及ぼす悪い事をしようとしてるんだよ！仲間として止めなきゃ！！」

「俺、今スーパーマリオやってるし・・・。」

「俺はゲームアンドウォッチやってるしなー・・・。」

「仲間とゲームどっちが大事なの！！」

「仲間って言っても天の助だから、ゲーム。」

「俺もゲーム。」

「もういい！私が止めてくる！」

「行ってらっしゃいー。」

「夕飯までには帰ってこいよ。」

回想終了・・・

「と言うわけだな。」

「アンタら本当に！最低ね！！」

「えー。」

「シバキまわしたいわね・・・。」

「あれ？何か変な匂いしね？」

「そう言えば？」

「大変だぜ！タカオ！」

ボーボボが慌てた様子でやって来た。

「どしたの？」

「ニュースに天の助の奴が出ててビュティが捕まってたんだ天の助の奴に！」

「何！？ビュティが！？？」

「しかも天の助のやろう、ところてんが食べたくて仕方なくなるトコロテインガスをばらまきやがったんだ！！」

「何だと！？こりゃ俺たちが天の助を殺・・・止めなきゃな。」

「今、殺すって言おうとしたでしょ？」

「天の助の奴は大手スーパ一の屋上に今いるみたいだ。」

「さっそく行くぞ！ビュティを助けるのと、トコロテインガスを止めるために！！」

スーパ一屋上・・・

「よくきたなボーボボにタカオ、俺を止める気なんだろう？」

「天の助！？お前その見た目！？」

「何をそんなに驚く？」

「そりゃ驚くわよ！？だってアンタの見た目……ハッチヒヤックじゃなああああい！！？」

そう今日の助はサイヤ人絶滅計画に出てくるハッチヒヤックのような見た目になっていた。

「気をつけて！ボーボボ、タカオ！天の助の見た目はこけおどしじゃないよ！！！」

捕まっているビュティがボーボボとタカオに忠告する。

「確かにいつもと違ってプルプルしてないしな。」

「だがしよせんは天の助、あっさり死ねえ！！！」

ボーボボは天の助を倒そうと攻撃を仕掛ける。だがしかし……

「遅いぞボーボボ。」

「何！？」

天の助はボーボボの攻撃をあっさりかわした。

「ば、バカな・・・天の助ごときに・・・。」

「今の俺はところてんの怨念によってパワーアップしている・・・人気食品が明るい光を浴び続ける中で暗い闇の中でたたずんでいるところてんのな!!」

「ところてんの怨念って・・・そんなのあるの？」

「くらえ!ところてんの怨念をリベンジャートコロテインボール!!」

天の助はところてんの怨念の塊をタカオとボーボボに向かって放った!

「ぐああー!!」

「天の助の技とは思えない威力だー!!」

「これが・・・ところてんの怨念だ。」

「ところてんってこんなに怨念溜まっていたの!!?」

「ぐ・・・天の助に負けんのか。」

「もう・・・ダメだおしまいだあー。」

「あきらめるのか？」

「誰だ？」

「私はパセリだ。」

「パセリ・・・ああ、よくステーキのつけぞいの食べられない奴か。」

「そうだ・・・よく食べられない奴だ。」

「んな奴が何でこんなところに？」

「奴を止めるためだ・・・ところでんと言う食品を無理矢理、人々に食べさせようとする奴を。」

「お前にできんの？」

「できる、できないじゃない・・・やるんだ！食品とは本来食べたと思って食べるもの無理矢理食べさせようなんて間違っている！」

「何を言っている食べられなきゃ食品の価値なんかない！それにお前も食べられない苦しみを知っているだろうが！」

「知っているさ・・・だが食べられる嬉しさも知っている！お前の様に食べられない苦しみにばかりに目がいつているわけじゃない！」

「何を・・・！？」

突如天の助の体から黒い煙のようなものが出て行った。

「お、怨念が！？」

「どうやら、ところてんたちは食べられる嬉しさにも気づいたよう

だな・・・残るは貴様だけだ!!」

「ちくしょーそんなバカな!!」

「怨念がなきゃてめえはただの雑魚・・・覚悟しろや!!」

「ひー!ごめんなさい!」

「謝ってすむわけねーだろうが!」

「どんなに目立たない食品でも必ず好いてくれる人はいる・・・それを食品はわすれちゃダメなんだ。」

パクッ

パセリさんは突然、小鳥に食われた。ボーボボは天の助を倒そうと攻撃を仕掛ける。だがしかし・・・

「遅いぞボーボボ。」

「何!?!」

天の助はボーボボの攻撃をあっさりかわした。

「ば、バカな・・・天の助ごときに・・・。」

「今の俺はとてろてんの怨念によってパワーアップしている・・・人気食品が明るい光を浴び続ける中で暗い闇の中でたたずんでいるところてんのな!!」

「とてろてんの怨念って・・・そんなのあるの?」

「くらえ！ところでんの怨念をリベンジャートコロテインキャン
ン！！！！」

天の助はところでんの怨念の塊をタカオとボーボボに向かって放
つた！

「ぐああー！！」

「天の助の技とは思えない威力だー！！」

「これが・・・ところでんの怨念だ。」

「ところでんってこんなに怨念溜まってたの！！？」

「ぐ・・・天の助に負けんのか。」

「もう・・・ダメだおしまいだあー。」

「あきらめるのか？」

「誰だ？」

「私はパセリだ。」

「パセリ・・・ああ、よくステーキのつけぞいの食べられない奴か。
」

「そうだ・・・よく食べられない奴だ。」

「んな奴が何でこんなところに？」

「奴を止めるためだ・・・ところてんと言う食品を無理矢理、人々に食べさせようとする奴を。」

「お前にできんの？」

「できる、できないじゃない・・・やるんだ！食品とは本来食べた
いと思って食べるもの無理矢理食べさせようなんて間違っている！」

「何を言っている食べられなきゃ食品の価値なんかない！それにお
前も食べられない苦しみを知っているだろうが！」

「知っているさ・・・だが食べられる嬉しさも知っている！お前の
様に食べられない苦しみがかりに目がいつているわけじゃない！」

「何を・・・！？」

突如天の助の体から黒い煙のようなものが出て行った。

「お、怨念が！？」

「どうやら、ところてんたちは食べられる嬉しさにも気づいたよう
だな・・・残るは貴様だけだ！！」

「ちくしょーそんなバカな！！」

「怨念がなきゃてめえはただの雑魚・・・覚悟しろやー！！」

「ひー！ごめんなさい！」

「謝ってすむわけねーだろうが！」

「どんなに目立たない食品でも必ず好いてくれる人はいる・・・それを食品はわすれちゃダメなんだ。」

パ
ク
ツ

パセリさんは突然、小鳥に食われた。

「えー！？パセリさん死んだ！？良いこと言ってたのにこれはないでしょ！！？」

いいんだ・・・食べ物では食べられる事が一番のしあわせ・・・私の生涯にいつぺんのくいなし・・・。

「パセリさあ ああ ああ あん！！」

こうして・・・食べるラー油絶滅計画は失敗に終わった・・・たった一人の犠牲によって・・・。

「犠牲って言うか・・・食われただけええええええ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4257y/>

魔法先生ボーボボ

2011年11月22日17時08分発行